

翼階に置いて、時々読みたてまつる。神護景雲三年歳の己酉に次るとしの夏五月の二十三日丁酉の午時に火を発し、惣家みなことごとく焼け滅す。ただし彼の経を納めたる筈のみ、盛なる燭火の中に有りて、かつて焼き損ふ所無し。筈を開きて見たてまつれば、経の色儼然しくして、文字宛然なり。八方の人視聞きて、奇異びずといふこと無し。諒に知る、河東の練行の尼の写せる如法経の功茲に顕る、陳時に王与女の読める経の火の難を免れたる力再示ると。賛に曰はく「貴きかな、榎木氏、深く信ひ功を積みて一乘経を写す。護法の神衛りて、火は靈しき験を呈す」といふ。是れ不信の人の心を改むる能き談にして、邪見の人の悪を轍むる頼たる師なり。

二の目盲ひたる女人薬師仏の木の像を帰敬ひて現に眼を明くること得る縁 第十一

諸業京越田池の南蓼原里の中の蓼原堂に薬師如来の木像在す。帝姬阿倍天皇の代に当りて、其の村に二の目盲ひたる女有り。此一の女子を生み、年七歳なり。寡にして夫無く極めて窮しきこと比無し。食を索むること得ず、将

に飢えて死なむとして、自づから謂はく「宿業の招ふ所なり。ただし現報のみにあらず。徒に空しく飢えて死なむよりは、善を行はむに如かず」とおもひて、子に手を控かしめて其の堂に送り、薬師仏の像に向ひ眼を願ひて曰さく「我が命を惜むにあらず。我が子の命を惜む。一は是れ二人の命なり。願はくは我れに眼を賜へ」とまうす。檀越見矜みて戸を開き裏に入れ、像の面に向ひて称へ礼ましむ。二日を逐て副ひたる子見れば、其の像の臆より桃の脂の如き物忽然に出でて垂る。子母に告知らす。母聞きて食はむと欲ひ、故に子に告げて曰はく「搏りて吾が口に含めよ」といふ。然うして食へば、はなはだ甜し。すなはちまた目開く。定めて知る、心を至して願を發す、願はば得ずといふこと無し。是れ奇異しき事なり。

二の目盲ひたる男敬ひて千手観音の日摩尼の手を称へて現に眼を明くること得る縁 第十二

奈良京薬師寺の東の辺の里に、盲ひたる人有り。二の眼精盲ひたり。観音を帰敬ひ、日摩尼の手を称念へて眼の闇きを明けむとす。昼は薬師寺に正東の

一 未詳。  
二 晨朝、日中、などという定まつた時に。  
三 七六九年。五月二十三日は庚寅にあたる。丁酉は五月三十日。五月二十三日が丁酉となるのは宝亀四年(七三三)。午時は、午前十一時から午後一時のころ。  
四 整った姿であること。法苑珠林・敬法篇・感心縁所引冥祥記に、周圓の経が灰燼の下に儼然如故であった、とする。  
五 そこなわれずにあること。法苑珠林・敬法篇・感心縁に、狐元軌の如法潔淨にして書写した経が火事に遭うも焼けずに宛然如故であった、とする。  
六 河東の練行の尼の書写した法華経は、龍門の僧法端の目には文字をあらわさなかつた冥報記(上)。この説話は語書に収録されているが、いづれも「如法」如法経という表現を含まない。法華経書写に関して、如法経が説かれる例に、集神州三宝感通録・下・敬恭の条がある。  
七 未詳。

第十一縁 今昔物語集・十二ノ十九に書承。  
八 平城京の東南隅、左京九条あたり所に所在したか。五徳池はその一部分の跡地か。  
九 所在不明。

二 いかなる宿業か、という具体相は述べられない。  
三 いたずらにむなしく飢えて死ぬことは、善行をおこなうことに及ばない。「徒空飢死」と「行善」とを比較し、「行善」をえらぶ。  
三 食や銭でなく眼を願っている。薬師如来本願経の第六大願、願我來世得菩提時、若有衆生、其身下劣、諸根不具、醜陋頑愚、瞽盲

跛躄、身癱背偃、白癩癩狂、若復有餘種種身病、聞我名已、一切皆得菩提具足身分成滿云、諸七大願、願我來世得菩提時、若有衆生、諸患逼切、無護無依、無有住処、遠離一切資生医薬、又無親屬、貧窮可愍、此人若得聞我名号、衆患悉除、無諸痛惱、乃至究竟無上菩提、この願にかかわる説話とする松浦貞俊の指摘がある。  
四 私の一つの命は、私と娘との二人の命である。  
五 底本訓釈「搏取也」。

第十二縁 今昔物語集・十六ノ二十三に書承。  
一 千手観音の手のひとつ。日精摩尼(日精)太陽を象徴した宝珠を持つ。「日精摩尼」と称されることが多い。「若為眼闇無光明」者、当於日精摩尼手(千手千眼観世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經)「日摩尼手」若人欲眼開求光明者、可修日摩尼法二千光眼觀自在菩薩秘密法經。「修」は陀羅尼を唱える意であろう。千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼經、千光眼觀自在菩薩秘密法經には、日精摩尼手(日摩尼手)に関して全く異なつた陀羅尼を掲載している。

三 秋篠川の傍り。  
六 外見上は眼球が正常で、視力が無いこと。  
七 薬師寺の千手観音は未詳。薬師寺縁起に又二体観世音菩薩像、坐高として孝徳天皇の皇后御願の一体と、後代の一体とを流記版によつて述べるが、孝徳天皇の皇后御願の一体がこれにあたるか。  
三 薬師寺の堂塔は南面して建てられていた。東門は奴婢門(薬師寺縁起。原文「屋坐坐薬師寺於正東之門」)。

門に坐て布巾を披敷きて、日摩尼の手の名を称礼む。往き来の人の見哀ぶ者は、  
 銭と米と穀物とを施して巾の上に置く。或るは巷陌に坐て称へ礼むこと上の如  
 くす。日中の時に鍾を打つ音を聞き、其の寺に参入りて、衆の僧に就きて飯を  
 乞ひて命を活けて数年を経たり。帝姫阿陪天皇の代に至りて、知らぬ二人来  
 りて云はく「汝を矜むが故に、我れ二人、汝の盲ひたる目を治さむ」といふ。  
 左右のおのおの治す。治し了りて語りて言はく「我れ二日を選んでかならず是の  
 処に来らむ。慎待ちて忘れざれ」といふ。其の後久しからずして倏に二の眼明  
 く。平復ゆること故の如し。期りたる日に当りて待てども、終にまた来らず。  
 贊に曰はく「善きかな、彼の二の目盲ひたる者、現生に眼を開きて遠く大方に  
 通ひ、杖を捨てて空手に能く見能く行く」といふ。誠に知る、観音の徳の力と  
 盲人の深き信となり、と。

法花經を写さむとして願を建てたる人日を断つ暗き穴  
 に願の力を頼みて命を全くすること得る縁 第十三

美作国英多郡の部内に、官の鉄を取る山有り。帝姫阿陪天皇の御代に、其

の国司役夫十人を召発して、鉄の山に入らしむ。穴に入りて鉄を堀取る。時  
 に山の穴の口、忽然に崩れ塞り動く。役夫驚き恐りて穴より競ひ出づ。九人  
 僅に出て一人後れて出づるひと有り。彼の穴の口塞り合ひて留る。国司上  
 下、圧されて死にたりと思ふ。故に惆悵ふ。妻子哭き愁へて、観音の像を凶絵  
 き、経を写し、福の力を追贈りて、七々日を選ること已に詔る。時に独穴の裏  
 に居て念はく「吾れ先の日に法花大乘を写し奉らむと願ひて、いまだ写さずし  
 て断えたり。我が命を全くして給へ。我れかならず果し奉らむ。闇き穴に居て  
 惆悵ふ。生長れる時より今日に至るまでに、此の哀に過ぎたること無し」と  
 おもふ。彼の穴の戸の隙に指刺すばかり開きて、日の光被至る。一の沙弥有し  
 て隙より入り来りたまひ、鉢に饌食を盥りて、以ちて与へて語りてのたまは  
 く「汝の妻子は、我れに飲食を供り、吾れを雇ひて救ふことを勧ふ。汝は  
 また哭き愁ふ。故に我れ来るなり」とのたまひて、隙より出で去りたまふ。去  
 りたまひて後に久しからずして、居る頂に当りて穴開け通り、日の光照り被及  
 るなり。穴の開け通ること広方二尺余、高五丈ばかりなり。時に三十余人、  
 葛を取らむとして山に入り、穴の辺より往く。穴の底の人、人影を見て叫びて  
 言はく「我が手を取れ」と云ふ。山人側に蚊虻の音の如きを聞く。すなはち聞

一手拭。和名抄・澡浴具に手巾太乃古比。  
 二 陀羅尼であろう。

三 「日中」は六時のひとつ。僧は正午を過ぎたならば食事をしない(上巻二十四縁「齋食」)。多くの僧の食べ残しを乞ひ集めたのである。  
 四 観音を信仰したので視力が回復した。とされずに、観音を信仰したので治療する人がやって来て治療した。とされていることに注意すべきであろう。どのような治療行為がなされたのかは未詳。千手千眼観世音菩薩広大圓滿無礙大悲心陀羅尼經には「雷盲眼暗」の治療方法が述べられている。詞梨勒果(ミロバランの果実)、菴摩勒果(セイタカミロバランの果実)をそれぞれ一個、搗き碎いてすりつぶし、白蜜または男子を生んだ女の乳をまぜて目にさし、観音像の前で呪を一千八遍となえ、室にこもって七日間、目に風をあてない。  
 五 上文の「必来」是処二が視力の回復を意味していたことが示される。

第十三縁 三宝絵・法十七、扶桑略記・元明天  
 皇条に引用。三宝絵より本朝法華驗記・下・一〇八に書承。本朝法華驗記より今昔物語集・十四・九に書承。  
 六 岡山県英田郡。  
 七 美作国の調に「鉄がみえる(延喜式・主計上)。英多郡に隣接する播磨国佐用郡にも鉄を産する(播磨国風土記)。

へ下文より推せば、坑道は垂直方向に掘られていたか。  
 九 穴をふさぐようにして次から次へと崩れてくる。  
 一〇 やつとのこと。

二 穴をふさぐ状態になって、崩れる動きは止まった。  
 三 穴の中にとじこめられた人の妻子。  
 四 以下は、死者に対しての追善の行ないが述べられる。妻子は、男は穴の中で圧死した、と思つているのである。男の生存を祈願しての行ないではない。  
 五 妙法蓮華經であろう。

五 中陰(中有)の期間。↓中巻三十八縁。

六 下文によれば、この食は妻子が追善のために供えたもの、と推測される。追善のための供物は最終的には死者のもとに届くと考えられていたのであろう。冥報記・上に、類似点をもつ説話が存する。山にて銀を採掘する男が穴にとじこめられたが、男の父の餽飯を受けた僧の呪願によつて一鉢飯を持った沙門が穴の中に来て男の飢えを防いだ、と。

六 すわつていた上方に。

元 原文「自穴辺往」。穴の辺を通つて往く、の意であろう。